

広島大学平和科学研究センター

## Newsletter

2000年

〒730—0053 広島市中区東千田町1—1—89

tel: 082-542-6975 fax: 082-245-0585

email: ipshu@ipc.hiroshima-u.ac.jp

<http://www.ipc.hiroshima-u.ac.jp/~heiwa/>

### ルワンダ：昨日、今日、明日

かねてより平和構築活動の観点から興味を持っていたルワンダに一週間ほど滞在する機会を得た。あわせてルワンダ国際戦犯法廷があるタンザニアのアルーシャにもやはり一週間ほど滞在した。ルワンダというと百万人が犠牲になったとも言われる1994年の大虐殺が記憶に新しい。人口およそ700万の小国で起きた惨事は、われわれの想像力の限界をはるかにこえている。しかし決してわれわれが思考の外に置き忘れてはいけないのは、その小国には今でも数百万人も普通の人々が、様々な形で過去と苦闘しながら、生活しているという事実である。

私が訪問したのは、ちょうど虐殺開始6周年目にあたり、国全体が喪に服し、種々の式典を行っている時期であった。新たに発見された数万単位の遺体が埋葬されている一方、国会では拘留中の10万をこえた虐殺犯罪者の処遇や、将来の国民的和解の手段が、話し合われていた。もちろん山積した問題のいずれもが、容易には解決不能なものばかりである。その一方、ビジムグ大統領辞任にともなって新大統領となったポール・カガメは、現在虐殺の発端となった94年のハビヤリマナ大統領暗殺謀議をはかったことが最近になって様々な方面から告発されている人物である。

日本から飛行機を乗り継いでルワンダに到着するのは、およそ30時間後のことだろうか。そこは確かに日本とは異なった世界である。しかしルワンダに来て思うことは、そこでも人は生き続けている、ということだ。ルワンダで会った人々は、日本から見れば異常とも感じられるような状態で（実際のところ異常なのではないかと私は疑っているのだが）、人を愛し、家族とふれあい、友と笑い合い、教会で神を祈り、悩みを打ち明け合い、政治情勢を皮肉ったり心配したりしながら、人間としての毎日を送っている。失ったものを取り戻すために、あるいは失ったものを理解するために、心に染みついたトラウマと戦っている。平和学者を目指す日本からの旅行者が、たとえばルワンダのような国で確認するのは、人はそれでも平和で幸せな生活を求め続けるということであろうか。

広島大学平和科学研究センター 助手 篠田 英朗

## 1999年度平和科学研究センター活動

### シンポジウム

広島大学平和科学研究センターの第24回シンポジウムは1999年12月17日、広島国際会議場にて「21世紀の日本の核政策—変動する国際社会の中で—」と題して行われました。当日は内外の50人の参加者がパネリストを囲んで活発な議論を展開しました。パネリストは以下の通りです。

松永信雄（外務省顧問・東京フォーラム共同議長）

基調講演「21世紀を視野に入れた日本外交」

梅林宏道（平和資料協同組合代表）

木村修三（姫路獨協大学教授）

黒沢満（大阪大学教授）

### 研究会

第125回（1999年4月28日）

中園和仁（広島大学大学院国際協力研究科）「返還後の香港：一国二制度の行方」  
（広島大学国際協力研究科政治社会動態論コースと合同）

第126回（1999年7月26日）

村田晃嗣（評者）・山田浩（討論者）：山田浩『IPSHU研究報告シリーズ研究報告No. 26：冷戦後世界の核状況とヒロシマ—「新核廃絶主義者」の見解を手掛かりにして—』合評会

第127回（1999年11月24日）

Akmal Hussain (Dhaka University), “Nuclear Issues in South Asia: A Bangladeshi Perspective”

第128回（2000年2月3日）

梅本哲也（静岡県立大学）「CTBT批准審議と米国の核政策」

第129回（2000年3月1日）

菅英輝（九州大学）「クリントン政権のアジア戦略」

第130回（2000年3月27日）

澤田眞治（岐阜大学）「地域統合・信頼醸成・核不拡散：南アメリカの事例」

### 出版物

『広島平和科学』（第22号、1999—2000年）掲載論文

Yūji Ōishi, “A Virtual State of Palestine: Interim Self-Government and the Next Step”

Yoko Ogashiwa, “South Pacific Forum: Survival under External Pressure”

松尾雅嗣「表記体系をめぐる紛争：文字紛争論序説」

水本和実「核軍縮提言における『理想主義』と『現実主義』—東京フォーラムの残した課題から—」

篠田英朗「ポスト冷戦時代における国際社会の国内選挙支援—民主主義の機能そして平和・人権—」

村上登司文「戦後平和教育論の展開—社会的考察—」

小林文男・柴田巖「1999年広島・長崎『平和宣言』の一考察—千葉工業大学中国人留学生の意識調査結果をとおして—」

小寺初世子「人権条約による人権保障の実効性について（続）—留保の問題を中心に—」

澤田眞治〈書評〉「国際関係理論と世界社会学の新しい地平：レベッカ・グラント、キャスリーン・ニューランド編『ジェンダーと国際関係』」

### 公開講座

平成11年度広島大学公開講座として「核軍縮と日本の役割」を1999年10月2日から11月6日にわたって開設。広島市民を対象に、松尾雅嗣「核軍縮の歴史」、中園和仁「中国の核戦略と東アジアの安全保障」、村田晃嗣「アメリカの核政策」、吉田修「途上国の核政策」、小柏葉子「南太平洋の核問題と日本」、宇吹暁「被爆体験と日本の反核運動」の全六回を行いました。

### センター専任研究員の研究教育活動

#### 松尾 雅嗣（教授）

学術書：Akiyuki Jimura, Yoshiyuki Nakao and Masatsugu Matsuo (eds.), *A Comprehensive Textual*

*Comparison of Traolus and Criseyde: Benson's, Robinson's, Root's, and Windeat's Editions* (Okayama: University Education Press, 1999).

学術論文：Masatsugu Matsuo, "Language Differentiation and Homogenization in Nested Conflicts:

Two Case Studies," *Journal of International Development and Cooperation*, 5(1), 1999.

Kawano, Noriyuki and Masatsugu Matsuo, *Language of Politics or Politics of Language? Toward an Integrated Perspective* (IDEC Research Paper 2000-1), (Higashi-hiroshima: Graduate School of International Development and Cooperation, Hiroshima University, 2000).

教育：大学院国際協力研究科「平和学」。総合科学部「社会科学外書講読B」、「国際平和学」、「戦争と平和に関する総合的考察」（分担）。

学会での活動：日本平和学会理事。

社会での活動：財団法人広島平和文化センター評議員。

#### 小柏 葉子（助教授）

学術論文：“The Pacific Island Countries in the Asia-Pacific Region,” *Pacific Island Nations in the Age of Globalization*, Committee for Pacific Island Countries, Foundation for Advanced Information and Research, Tokyo, 1999.

「南太平洋フォーラムと気候変動に関する国際レジーム」、小柏葉子（編）『太平洋島嶼と環境・資源』（国際書院、1999年）所収。

学会報告：「南太平洋フォーラム—外因的契機による地域協力の展開」、日本平和学会 1999 年度春季大会、1999 年 6 月。

“The South Pacific Forum: Survival under External Pressure,” The Third Annual Conference of the Centre for the Study of Globalisation and Regionalisation of the University of Warwick, September 1999.

翻訳：『ビッグ・デス—ソロモン人が回想する第二次世界大戦』（監訳）（現代史料出版、1999 年）。

教育：大学院国際協力研究科「地域協力論」、「国際関係特論」（分担）。総合科学部「社会外書講読A」、「戦争と平和に関する総合的考察」（分担）。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤講師「フィジー語研修」（8月）。

学会での活動：日本国際政治学会評議員。

社会での活動：国立民族博物館共同研究会「メラネシアの都市と都市文化の人類学的研究」委員。国立民族博物館地域研究企画交流センター連携研究共同研究会「オセアニアにおける国家統合と地域主義に関する研究」委員。社団法人日本・南太平洋経済交流協会「南太平洋委員会」委員。国連大学グローバル・セミナー第1回島根セッションプログラム委員会委員。

### 篠田 英朗（助手）

学術書：*Re-examining Sovereignty: From Classical Theory to the Global Age* (London: Macmillan, 2000).

学術論文：「国家主権概念をめぐる近代性の問題—政治的概念の『エピステーメー』の探求—」、広島大学総合科学部紀要 I I 『社会文化研究』第 2 5 巻、1999 年 12 月。

学会報告：「国家主権概念の変容：立憲主義的思考の国際関係理論における意味」、日本国際政治学会 1999 年度大会、1999 年 5 月。

「ポスト冷戦時代における民主主義の機能—平和構築過程での選挙に対する国際社会の支援」、日本平和学会 1999 年度秋季研究大会、1999 年 11 月。

“The Politics of Legitimacy in International Relations: The Case of NATO’s Intervention in Kosovo,” 2000 annual convention of the International Studies Association, March 2000.

書評：Review of John Hoffman, *Sovereignty* (Buckingham: Open University Press, 1998, 129 pp.), *Millennium: Journal of International Studies*, 28(1), 1999.

社会での活動：ひろしま国際センター「あじあ塾」講師。

### 人事

1999年3月31日：事務員の北谷美由紀が医学部に異動。

2000年4月1日：笛吹（うすい）紀子が新事務員として赴任。

### 1999年度研究プロジェクト予定

平和科学研究センターは2000年度も引き続いて「ポスト冷戦時代の核問題と日本」と題したプロジェクトを行います。